資料１

第１分科会整理案（たたき台）に対する各地区部会の意見

令和６年２月１日

目　次

Ⅰ　魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方
1　検討に当たっての視点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　求められる力と人財像　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3　県立高等学校教育の方向性　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　これからの時代に求められる学科等の充実
1　全日制課程全体　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
（1）普通科等　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
（2）職業教育を主とする専門学科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
（3）総合学科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2　定時制課程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
3　通信制課程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
4　その他　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅲ　多様な教育制度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

Ⅳ　各校の特色ある教育活動の充実に向けた取組等
1　特色化の推進　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
2　多様な主体との連携の推進　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
3　小規模校における教育活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
4　その他（特色化に向けた取組全般）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

Ⅴ　第２分科会での検討における留意事項等　・・・・・・・・・・・・・・・・・15

Ⅰ　魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方

１　検討に当たっての視点

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　社会が急速にかつ、大きく変化している中、それに対応するだけでなく、さらにその先を予測するような視点が必要。

○　グローバル化や情報化といった要素が不足している。これらは欠かすことができない視点である。

○　教育振興基本計画では、生徒のウェルビーイングの向上だけでなく、社会の担い手の育成の視点も挙げられているため、グローバルな人財だけでなく、地域社会の担い手の育成等の視点も必要。

○　社会の学校に対する期待として、進学の部分が大きかったが、座学による進学を推進しても、高校３年間だけの視点での人財育成となってしまうため、社会の学校や教育に対する意識の変容が必要。

○　課題を解決できる具体策となっているかが大切である。

【上北地区】

○　今後は費用対効果を更に意識した検討が必要。

【下北地区】

○　これから子どもの数が大幅に減少し、地域の産業構造等が変化する時代において、子どもたちが成長し続ける環境を保障するためにも、長期的な視点を持った検討が必要。

○　県下全域で取り組むべき内容と各地域独自の施策を明確に区分し、実効性の高い検討とする。

○　地域の実情等を考慮した上で、優先度や実現可能性を踏まえた、必要かつ実現可能な施策の焦点化を図りたい。現時点はスタート地点であり、現行の総花的な内容は妥当のものであるが、今後具現化を目指す施策集としていくことが求められる。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

意見なし

２　求められる力と人財像

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　時代の変化に対応することは大切ではあるが、それだけでは後手になってしまう。変化の激しい時代において自分で考えて行動し、失敗しても乗り越える経験をとおして自信を持たせるような教育活動を行うことで、諦めずに自分で考えていける主体性を持った人財を育成すべき。

【中南地区】

○　高校に関しては、どのような学校が求められているかという保護者の目線がかなり重要だと思う。親としては、子どもがどういった人財になっていくかが大事であり、青森への理解を深め、魅力を発信し、地域の発展に貢献できる人財が一番魅力的だと思っている。

【上北地区】

○　「平均的に何でもできる人財」と「特徴的なことに突出した能力を持つ人財の育成」というような内容があってもよいと考える。学校教育ではバランス良く生徒を育てようとしているが、特に普通科以外の学科では、得意なことを更に伸ばし、一つのことに長けた人財が１０年後の社会で必要になると考える。

【三八地区】
○　社会で通用するための対応能力やコミュニケーション能力が必要である。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

意見なし

３　県立高等学校教育の方向性

＜県全体の視点による意見＞

【西北地区】
○　「本県の子どもたちが学びたい場所で学びたいことを学べる環境づくり」という視点には、学びたい場所で３年間学び続けるという考え方のほか、１年間学んでみて、別な学びの場を求めたときに、そのような学び方を提供できる環境を整備するという考え方もある。高校入学後のギャップや新たな魅力を感じた生徒の学びを継続するため、県立高校間の転学等の仕組みについて考えていく必要がある。
○　キャリア教育において、将来的な職業選択に関することも大事であるが、地域愛や地域貢献などのキャリア発達に関わる部分は、普通科にこそ必要である。高校卒業後、地域を離れたとしても、いずれは地域に帰ってきて、地域貢献や地域活性化をするところまでを見据えたキャリア教育の充実に努めていくべき。
○　様々な県立高等学校教育の方向性が打ち出されているが、これらをどのように学校現場に落とし込んでいくかが一番難しい。教員がこれらの考え方を理解し、実際の手法に組み込んでいけるか、その手法が生徒にきちんと伝わるかを念頭に置きながら検討を進め、実践していければよい。

【中南地区】
○　教科教育の充実が第一にあり、プラスアルファとして特色化があると考える。
○　教育委員会だけではなく、県庁全体で経済支援や補助等を行える体制を整備するなどし、本県の子どもたちが学びたい場所で学びたいことを学べる環境づくりができればよい。

【三八地区】
○　子どもたちが高校を選ぶとき、学力や保護者の意見を重視することが多いように感じるが、後悔している人も実際にはいるため、高校の魅力化も大事だが、各校の魅力をしっかりと見える化し、子どもたちが「こういう学校に行きたい」、「こういう学校に行ったらこういうことができる」といったデザインを描けるような道筋を作ることが大事。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

意見なし

Ⅱ　これからの時代に求められる学科等の充実

１　全日制課程全体

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　普通科と農業科の併置校では、普通科と農業科の生徒が一緒に田植えをしたり、運動会に農業を取り入れたりするほか、普通科が専門教育や施設を生かした探究活動を行うなど、とても特色があった。そのような特色を他校にもモデルとして示すことで、工業科ではものづくりを生かした特色づくりなど、各学科の特色化につながる可能性がある。

【西北地区】

○　今後の方向性の実現に向け、子どもたちが本気になって、自分の将来のビジョンを持って取り組んでいくことが大事であるが、その部分が少し足りないように感じる。

○　各校の魅力や取組を地域の住民や中学校にアピールすることが必要。

【中南地区】

○　意識調査の「将来なりたい職業」について、何も決めていない中学生の割合が高い。その中で、普通科を志望するのが６０％を超えている。子どもたちは自分がやりたいことをまだつかみ切れていないので、将来の職業についてというよりも、「こういうことを研究したいからこういう大学に行く、そのためには何を勉強すればよいか」といった視点でキャリア教育を充実させることが必要。

【上北地区】

○　単に関係機関から講師を招いて知識等の伝達をするだけではなく、工業科や商業科のように県内定着に向けて地元企業等と実践的な交流をして、高校生が地元に定着あるいは大学進学後に地元に環流するような連携が全学科で求められる。

【下北地区】

○　様々な学科があってよいと思うが、高校卒業後を見据え、進学や就職といった次のステージに結びつく学科が必要。

○　大人が地域に必要であると考える学科と子どもたちが求める学科とでは大きな溝があることを常に認識しながら、求められる学科を考えていく必要がある。

○　大切なのは、子どもたちの将来に直結する科目の充実である。科目が資格取得や進学、就職につながり、子どもたちの将来を具体的に支えるものであればよい。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【下北地区】

○　下北地区において、令和９年４月の高校入学生は約５００人、１０年後の令和１９年には約３００人になる見込みであり、このような状況の中、現在の学科が将来的にベストであるとは限らないことから、学科の組み合わせに関して、もっと柔軟に検討していくことが必要。

○　リモート授業等を活用した上で、なお必要な実習等が地域内で履修できる地域で完結できる教育を目指した学科の在り方についての検討が必要。

（１）普通科等

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　特別活動等の人間性の向上の部分以外であれば、普通科は世界中どこにいても学べる。

○　最近、高い学力を持った子どもたちが県外の高校へ進学しているのは、青森県の普通科が高い資質を持った子どもたちの能力を最大限に引き出せていないからではないか。そのため、高いレベルの理数教育やグローバル教育を行う学校として、国の指定を受けるだけではなく、青森県独自に５０人程度の少数精鋭で高いレベルの教育を行うような特色を持った学校をつくってもよいと考える。このような学校で学び、県外へ行ったとしても、最終的には青森県に戻り本県や日本、世界をリードする人財を育成するといった視点があってもよい。

○　私立高校ではスポーツや学科の学び等による特色化が進められ、結果として志願者を増やしている。県立高校の普通科においても、目的を持って進学してもらえるような特色を見つけることが重要。

○　青森県の高校に魅力を感じず県外に進学したり、将来関東の大学に進学するため、高校段階から関東へ行った方がよいと考えたりする保護者・生徒が増えていることから、特色化が非常に重要である。普通科だから特色がないのではなく、普通科だからこそ特色を持ったり、社会と触れる機会を増やしたりしないと勝ち残っていけない。

○　私立高校の英語科ではネイティブの教員が数多く配置されるなど、特色化が図られており、県立高校においても、特色化を進め、魅力を高めたほうがよい。

○　スポーツ科学科が設置されている高校においては、その学校に進学すれば、魅力ある競技ができたり、全国大会に出場できたりすることも、一つの特色や魅力となると考える。

【上北地区】

○　普通科では、大学進学を意識した場合、受験に向けた学習をしなければならないため、魅力づくりの難しさを感じるが、子どもたちに主体性を育てることが重要であり、体験活動をはじめ、主体的に行動できるような取組を行う方向性とすることができれば、普通科においても魅力ある教育課程を編成することができると考える。

○　今の子どもたちはコミュニケーションが不得意で自己肯定感も低く、自分をアピールするのも苦手であると感じる。以前ニュージーランドの学校を視察した際、舞台のある教室もあり、そこで自己表現をするような授業があった。日本でも知の部分を学ぶだけではなく、もっと自己表現をする場があってもよい。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【東青地区】

○　青森市ではねぶたアート等のアートに関する取組が進められようとしているほか、県内に美術館が５つもある地方都市は少ないため、その特長を生かすべきである。これらを踏まえ、県内の美術館で働く人財を地元で育成したり、美術を好きな子どもたちを青森県に呼び込んだりすべき。

（２）職業教育を主とする専門学科

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　農業高校に視察に行った際に、ＮＰＯと連携して子ども食堂に参加したり、フードロスについて学んだりしており、生徒が生き生きと学び、とても楽しそうに見えた。農業の学びに魅力を感じ、遠方から通っている生徒もいるとのことだった。農業科だけでなく、工業科や商業科も特色を出しやすいと思うので、子どもたちが分かりやすい特色を打ち出していければよい。

○　小・中学校でキャリア教育を行っているものの、高校進学時にどの職業に就くかのイメージを固めることは難しく、進学の道があることや、地元に就職先があるといった卒業後の選択肢があることが伝われば、普通科だけでなく職業学科に進むといった選択肢も増える。

○　簿記やそろばんについて学んでいた昔の商業高校と比べ、現在は台湾との連携等グローバル化に対応した学びを行うなど、非常に学習内容が発展しており、時代に合わせた変化は大事である。

○　保護者からすると、学校紹介の内容が難しくて分かりにくい。各高校が学校紹介のために中学校を訪問していると思うが、子どもたちが理解できているか疑問であり、職業学科はもっと学科に関する学びに特化し、その特色や楽しさをかみ砕いて分かりやすく説明すべき。

○　高校でもコミュニティ・スクールの導入が進められている段階だと思うが、特に職業学科を有する高校においては、スクール・ミッションやスクール・ポリシーの実現に協力してくれる人材に学校運営協議会に入ってもらい、教育活動を後押ししてもらうべき。

【西北地区】

○　工業高校の生徒が農業高校へ来て、温室にセンサーを取り付けるなど、現場実習を兼ねながら、他学科の分野横断的な学びにより、知識や理解を深めることは非常によい。

【中南地区】

○　農業、工業、商業や家庭科での学びの楽しさが中学生には伝わっていないようであり、それを知らないがゆえに定員割れしている学科があるのはもったいない。もっと産業教育や専門高校の魅力を発信していく努力が必要。

○　学校視察を通じて、中学校に高校の先生が来てもらうより、中学校の先生が高校を見たほうが魅力は伝わりやすいと感じた。

○　小学校５・６年生ぐらいで探究活動の一環として高校訪問をしてはどうか。また、教員よりも生徒が説明するとより効果がある。

○　農業高校ではドローンなどの最先端技術を活用したスマート農業や、グローバルＧＡＰの認証取得に向けた取組など魅力ある取組を行っているが、ほとんどの中学生はそのような魅力を知らない。中学校３年生になるともう特定の高校へ意識が向いているため、高校の魅力を知る機会や交流する機会を、中学校１・２年生や小学校高学年に提供することが必要。

○　小学校段階から様々な体験学習を行う機会を与えることが重要。高校で体験学習を行っていることが中学生以下の子どもたちに知られていないため、更なる周知が必要。

【上北地区】

○　「様々なトピックへの対応が求められる中、本県としてどのトピックを強調していくのか」という意見があったが、基本的な考えとして、コミュニケーション能力の育成等、全ての学科において生徒に対して目指すところは一緒ではないか。ただ、普通高校より商業高校のほうが教育課程の編成の面で、生徒の力を柔軟に発揮させられるような状態にある。普通高校、特に進学校は受験科目の関係で、同じような教育課程となっているため、様々な学科を設置することで、それぞれの特色を出している。

○　ＩＣＴの活用による教育環境の充実は大事である。また、ＩＣＴの活用だけではなく、ＩＣＴそのものを学ぶ学科も必要であると考える。ＤＸに関して子どもたちはすごく興味を持っており、ＩＣＴに関して学ぶ学科で学習した知識を、例えば配送業や農業等の分野に生かしていきたいという子どもたちが多くいるので、令和１０年度以降の学科として大事になってくると考える。

【下北地区】

○　保護者や子どもたちが求めているのは、就職率１００％ではなく、離職・退職者がゼロとなる進路指導である。

【三八地区】

○　現在学んでいる分野と高校卒業後の進路が全く異なる生徒が多く、要因として、「入りたい高校」ではなく「入れる高校」を選ぶといった考え方があることや、中学校と高校の接続がうまくいっていないことなどが考えられる。

○　普通科に比べて職業教育を主とする専門学科は、就職のイメージが強く、保護者としては、とりあえず普通科に進学してほしいと思ってしまうが、どの学科も魅力的であるため、高校を選択するに当たっては、子どもが将来何をしたいのかを小・中学校段階から保護者や教員が子どもときちんと話し合うことが大事。

○　中学生の高校選択に資するよう、各校の魅力や目指す方向性を動画で発信するなど、情報発信を充実させていくことが大事であり、普段の授業や高校生の研究発表の様子を見せる機会を作るなど、中学生だけでなく、保護者に対しても情報発信することが効果的。

○　あらゆる業種において、担い手不足が喫緊の課題となっており、人口減少が進んでいる現状を踏まえると、担い手となる人財の育成が急務である。

○　職業教育を主とする専門学科において、基礎・基本を重視するのか、進学・就職のどちらに重きを置くのかなど、明確な方向性を打ち出すことができれば、それが魅力に繋がると考える。

○　工業科においては資格取得に向けた取組が活発であるが、勤務時間内で資格に関する指導のほか、授業や部活動、研修など全てをこなすことは難しく、働き方改革との一体的な実施が必要不可欠。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【東青地区】

○　青森市のホタテ養殖業者の多くが被害にあったほか、陸奥湾における水産業の話題が多く取り上げられているにもかかわらず、東青地区に水産業に関する学科がなく、水産業に関する課題を解決するための人財を育成する場がないことは不安である。

【下北地区】

○　下北地区には、現在のところ商業科、水産科、看護科等がないが、このような学科があれば、そこに進学する生徒もいると考える。

○　子どもたちが下北地区の高校にない学科を希望する場合には、下宿等に入り他地区の高校に通学するような状況であるため、現在設置されていない学科の新設は必要であると考える。

【三八地区】

○　八戸市では、ＳＴＥＡＭ教育の推進のため、海洋開発研究機構（ＪＡＭＳＴＥＣ）と連携しながら、教材開発に取り組んでいる。八戸市内の小・中学校においても、この教材を活用しながら、海洋教育に取り組んでおり、こうした取組が高校や大学まで途切れることなく繋がっていけばよいと考える。八戸工業大学では、ＳＴＥＡＭ教育を核にした講座を開設しているため、小学校から大学までの接続がスムースになるよう、八戸水産高校に海洋教育や海洋科学といった視点を持った学科があればよい。

（３）総合学科

意見なし

２　定時制課程

＜県全体の視点による意見＞
【東青地区】 ○　現状として、不登校経験や発達障害のある生徒も在籍しているとは思うが、これからは自分らしく学びたいとの理由で定時制課程を選択する生徒もおり、もっとフレキシブルに学べることをＰＲしてもよい。 ○　定時制課程は昔とイメージがかなり変わってきているが、保護者には何か問題のある生徒が通う課程とのイメージがついてしまっているため、働きながら学びたいという志望を持った子どもの居場所がなくなると思う。 ○　定時制課程に進学する動機は様々であるため、基礎学力が身に付いていない生徒から、進学したい生徒まで幅広く在籍しており、先生方は生徒に合わせてきめ細かな指導を行っている。 ○　北斗高校には、職業学科が設置されていないが、職業に触れる機会や、他者とのつながりを創出するため、工業高校や商業高校の生徒との交流があってもよい。 ○　定時制課程で自分の壁を克服していく上で、編入等により、新たな環境で学べるような機会も提供できればよい。 ○　中学校までは半分程度しか登校できていなかったが定時制課程で皆勤賞となった生徒もいる。また、サタデースクール等の様々な方法で不登校経験がある生徒の活躍の場をつくっている。このように、定時制課程では様々な事情を抱えた生徒を受け入れ、個別に対応しており、行政など、様々な立場の人がバックアップし、教育を充実させていけば、多様な学びの提供が実現されると考える。 【中南地区】 ○　中学校の教員は、特別支援学級における愛護（療育）手帳をもらえない生徒の進学に非常に危機感がある。定時制・通信制課程の倍率も上がってきているため、定時制・通信制課程の教職員数が足りず、スクールソーシャルワーカーの充実も必要。 ○　「通級による指導を、定時制課程ではなく全日制課程で行う動きが他県で多く見られる」とあるが、青森県でも実現できればよい。 【下北地区】 ○　定時制課程の生徒は、職業観・勤労観を学校以外のアルバイト等で培っているため、学校では普通教育をしっかりやっていくことが大切であり、普通教育も専門教育につなげる架け橋として充実させていくことが大切。
＜各地区の実情を考慮した意見＞
【上北地区】 ○　中学校には不登校傾向の生徒もおり、そういった生徒が高校進学を目指す際に、定時制・通信制課程が大事な役割を果たしている。本校でも、別室登校であった生徒が三沢高校の定時制課程へ進学し、様々な体験をしながら、今は登校できているといった事例が多く見られ、定時制課程の必要性を感じるため、上北地区に定時制高校も残してほしい。 【下北地区】 ○　以前は、勤労学生や学力が低い生徒が主に入学していたが、現在は、中学校時代に不登校だった生徒が多い。入学理由としては高校卒業の資格を取りたいというのが多い。普通科や専門学科とは別に、教育の一つの居場所として、下北地区には定時制課程は必要。

３　通信制課程

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　通信制課程のない地区から通信制課程の高校に生徒が進学した場合、スクーリングのために登校するにはかなりの時間がかかる。ＩＣＴの活用も考えられるが、対面で授業を受けるのであれば、通信制課程の高校には月１回だけ通い、残りは地区の全日制課程等でスクーリングができるようにすることで通学しやすくなり、中学生にとって進学先の選択肢が増えると考える。

○　通信制課程については、学び方の自由度が高いことを生かすことで、もっと特色が出せる。

【西北地区】

○　近年では、不登校や集団行動が苦手な生徒が増加し、通信制課程のニーズが高まっている。今後は、多様な生徒を受け入れつつも、魅力ある教育課程を編成し、学び方を選べる魅力ある学校であることを発信していくことが必要。

○　不登校や集団行動が苦手な生徒が増加しているのであれば、専門性の高い通信教育を受けられるような環境の整備が必要。青森県でそのような環境を整備することが難しいのであれば、専門性の高い通信教育を受けられる他県の高校を紹介するなど、県内の高校に限定するのではなく、生徒の選択肢を広げることも大切。

【中南地区】

○　通信制課程は今後もますます需要が増えていくほか、年度途中の転入学や編入学により、特に秋口半ばから生徒が増え、講師が不足することもあるため、今後の通信制課程の在り方を考えていく必要がある。

【三八地区】

○　通信制課程は、進路変更の受入先のようなイメージがあると思うが、近年では、通信制課程の多様な学びを求めている生徒は多く、今後、通信制課程を希望する生徒は増えてくると思う。通信制課程の在り方について、保護者を含めて社会全体で考え、子どもたちの良さを伸ばしていくための選択肢として通信制課程もあるということを発信していければよい。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【西北地区】

○　西北地区では、私立高校の通信制やアシストクラスを希望する子どもたちが多くなってきているように感じており、今後、西北地区の県立高校としても、多様な生徒を受け入れる環境を整備する必要がある。

【上北地区】

○　現在、上北地区には通信制課程がないが、現在の設置校のみでも何とかやれており、上北地区への設置は少子化の現状を考えると難しい。

【下北地区】

○　定時制課程の課題は、編入生が修得科目によって、通常であれば２年で卒業できるところ３～４年かかってしまうところにあるが、カリキュラム上難しい部分もあるため、下北地区に通信制課程の高校があってもよいと考える。

４　その他

＜県全体の視点による意見＞
【中南地区】 ○　「岩手県安比高原に開校したハロウ・スクールを参考としてはどうか」とあるが、魅力をつくるという意味での特色化を打ち出す参考ということと思うが、正式な日本の学校ではない（学校教育法第一条学校ではない）ところを参考とすることに違和感がある。もともと日本の子弟を対象としておらず、高い授業料と寄宿料に拠っており、どんなに良くても県立高校ではできない。 【上北地区】 ○　学校においても文化祭等以外でも講演会を実施するなど、日本のリーダーとなっているような方の話を聞く機会があればよいと考える。 【下北地区】 ○　タブレットを活用し、児童生徒・保護者の意見を悉皆調査することで、ニーズの的確な把握に努める。 ○　岩手県のハロウ・スクールや学力の高い私立高校等では、子どもたちに考えさせ全てやらせるという教育方針であるとの話を聞く。全てに当てはまるとは思わないが、このようなことを取り入れていくことも重要である。 【三八地区】 ○　自分のやりたいことや意見を言え、自発的に行動できるようになるきっかけづくりとして、アセスメントツールを活用し、自分の特性や強みなどの把握に繋げられるような時間を設定することが必要。
＜各地区の実情を考慮した意見＞
【上北地区】 ○　軍人の家族は基地内の学校に無料で通うことができるが、そうでなければ基地内の学校に通うのは高額な学費になる。三沢市にアメリカンスクールがあれば、学費が安いため小規模であっても需要があるのではないか。また、全て英語で授業をするような高校が今はないが、そういった経験を与えることで、飛躍的に語学力も伸びると思うので、グローバル関連学科等の設置も含め、検討の余地があると感じる。

Ⅲ　多様な教育制度

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　本県では青森・弘前・八戸の３地区でバランスよく取組を進めてきており、中高一貫教育校についても、新たな設置には課題があるかもしれないが、この３地区に配置してもよいと考える。

○　中学校・高校の間には壁があるように感じるが、中高一貫教育は中学生が普段から高校の様子が分かるためギャップが生じなくて非常によい。全ての学校が中高一貫教育校である必要はないが、配置されることで、他の中学校・高校が刺激を受けたり、よい部分を取り入れたりして、中高の円滑な接続につながると思うが、入学後のミスマッチを抱えた生徒に対する手当があるか気に掛かる。

【中南地区】

○　柔軟な学びが可能である特徴に対して、卒業に必要な単位だけを取得すればよいとの認識を持たれると、単位制の良さを生かすことはできない。

○　教育制度等の周知について検討が必要。

【三八地区】

○　近隣に中高一貫校があることで刺激になる部分もあるが、市町村立中学校に入学しない生徒が一定数出てくるため、市町村立中学校に与える影響は少なからずある。

○　中高一貫教育について、進学実績の向上を目標にすると、いずれ行き詰まりを見せると思う。進学実績ではなく、育成したい生徒像を明確化し、結果として学びに対するモチベーションが上がり、進学実績も付いてくるようにしなければ、数字だけを追い求めるようなかつての時代に戻ってしまうと考える。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【上北地区】

○　少子化により、倍率は下がってきているものの、附属中学校は保護者や生徒のニーズは大変高く、継続しての存続をお願いしたい。

【下北地区】

○　下北地区は、地域完結性が求められると考えていることから、少ない学級数で様々な科目を学ぶことができ、大学科を超えた学びが可能となる総合選択制を導入してほしい。

Ⅳ　各校の特色ある教育活動の充実に向けた取組等

１　特色化の推進

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　情報端末を活用しながら有名予備校講師の授業を受けるなど、高校でもＩＣＴを活用した取組が進められることで、小・中学校と高校間でのＩＣＴの活用の状況の差は埋まっていくものと考える。

○　特別支援学校との連携は、現在、最も求められていることである。特別支援学校での採用を増やし、人事交流により、全県の小・中学校や高校に配置することで、質の高い教育を実現させてほしい。

○　特別な支援が必要な生徒が増えているため、研修等により教員の指導力を向上させることが重要。

【西北地区】

○　全国からの生徒募集導入校において、魅力ある取組を実施したり、魅力発信に取り組んだりしているが、本県の入学者選抜の実施時期が遅いという話を聞いており、魅力ある取組を実施しても、入学者選抜の実施時期の遅さにより本県の高校に目が向かないことが考えられる。

【中南地区】

○　本県の場合、通学環境に配慮して設置している高校は、生徒がいないからといってもなくせない。他県では教員配置の課題等に対してＩＣＴを活用し、教員数が少ない教科・科目について、県総合学校教育センターのような機関から遠隔授業を実施している。遠隔授業を単位認定できる制度の整備が進められれば、小規模校において開設が難しい科目の履修と単位修得が可能となる。小規模だからこそ受け入れてもらえる、そこで頑張れる生徒もいるため、ＩＣＴの利点を生かさなければならない。

○　小・中学校である程度ＩＣＴを活用した授業を行っていなければ、高校に進学したときに授業のスピードについていけるのか心配であり、小・中学校段階からＩＣＴ活用能力を身に付けることが必要。

○　対面授業のほうが、時間をかけた遠隔授業よりもはるかによい授業ができる。遠隔教育に向けて様々調べ、試行錯誤しながらやって、ようやく普通程度の授業にはなるが、それでよしとするのか。教育の質の確保という観点では、遠隔授業は今の技術ではなかなか難しいところがあり、予備校のサテライトのようにただビデオだけ見ているような一方的なことはやれても、双方向にした途端、生徒５人に対して教員が３人必要になるなど現実的ではなく、それなりの学力を保障することも難しい。ただ、教科によっては効果的な活用ができる場合もあるので、遠隔授業の更なる研究は必要。

○　ＩＣＴについては、遠隔授業としての活用ではなく、学習支援など補助的な活用が望ましい。

○　通信機器やソフトも改良されていることから、学校をなくすのではなく、自宅から通えるところに学校が残っているようにしたい。遠隔授業は対面授業と比べ課題は多いが、それでも地域から学校がなくなるよりは遠隔授業の実施を検討すべき。

○　地域の活性化については、地域に学校があるかどうかが非常に大きく、小・中学校も高校もなくなると大変な事態になり過疎化が進むため、統廃合は慎重に検討しなければならず、ＩＣＴ技術の進歩によって、遠隔授業を活用することもその選択肢となりうる。

【上北地区】

○　全日制課程の高校にも、障がいのある生徒が入学してきており、そのような生徒に対して、担任・学年主任・養護教諭・教科担当等でバックアップしながら指導に当たっており、教員の負担が非常に大きくなっている。通級担当の教員の配置や、特別支援学校との連携等による指導の仕組みづくりが必要。

○　生徒数が少ない地域の中で、生徒を奪い合っていても、根本的な解決にはつながらず、入学する生徒の分母を増やすことが大事であり、そのためには全国からの生徒募集に本腰を入れていかなければならないと考える。全国からの生徒募集に関しては拡充が必要で、拡充に当たっては地域みらい留学への参画と県教委による参画費の負担が必要。

○　本校には他県の高校を受験する生徒もおり、特色ある高校であれば、生徒の受験とともに保護者も県外へ一緒に行くという事例もある。本県でも特色のある高校があれば他県からの入学生も増えると考えるため、全国からの生徒募集の充実の視点と、特色ある高校にしていくための取組の充実を図った上で保護者の転居を要件とする受検手続きの簡略化等の視点を持つことが必要。

【下北地区】

○　様々な特性を持つ生徒が高校に在籍しているため、課程や校種を越えた校外通級を全地区で実施してほしい。高校では独自に特別支援学校と連携する等、生徒の支援に努めているが、制度化することが望ましい。

【三八地区】

○　県内の小・中学校の不登校者数は過去最高となっており、県内のいじめの件数も増加している。魅力ある高校づくりも大事ではあるが、せっかく入学しても卒業できない生徒が出るといった状況を作らないよう、不登校やいじめへの対策について考えていく必要がある。

○　不登校の生徒が安心して学習できるよう、学校以外の場所における学びの継続が可能となるような環境づくりが必要。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【東青地区】

○　青森市の中学生は情報端末等を活用した学習に慣れており、その特長を生かすべき。ＩＣＴについては、教員が対応できていない現状があるが、小・中学校では、青森市内でＡＩ型ドリル教材の活用などについて検討していくので、高校においてもＩＣＴの活用を進めてほしい。

【西北地区】

○　西北地区において、サテライト教室のようなものを設置し、ＩＣＴを活用しながら、他校の授業を受けることができるような環境を整備することで、地域の高校を閉校することなく、生徒のニーズにも対応できるのではないか。地域によっては、高校がなくなることで地域の活性化にも大きく影響するため、サテライト教室を設置することで、協力してくれる自治体も出てくると思う。また、サテライト教室には、管理能力がある校長経験者を再任用で配置することで、多様な対応が可能になると考える。これから２０年、３０年後のことを考えれば、サテライト教室における遠隔授業等を実施していかないと、地域から人がいなくなってしまうのではないかといった危機感を持っており、そういった新たな制度も含めた仕組みづくりを検討していく必要がある。

２　多様な主体との連携の推進

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　高校と小・中学校との連携によって、小・中学生の高校への理解が進む。また、小学生のうちからこの高校に行きたいという思いを育むことは重要。小・中学生が将来像を描けるよう、様々な団体や学校等において、職業についての学びを行っており、その学びをさらに深めるためにも小中高の連携は有効である。特に、専門高校との連携は職業観の醸成にもつながるため、進めてもらいたい。

○　高校に求められることの全てを実現しようとすると、高校の中だけでは完結しない。その実現に向けた方策として、地域の様々な団体や産業界等との連携に関する意見が出されているが、地域課題の解決に取り組むＮＰＯなどとの連携により、さらに教育活動の幅が広がると考える。教員の多忙の状況を踏まえると、新しい連携を構築することは難しいと思うため、学校ごとにコーディネーターのような人材がいれば連携がさらに広がると考える。

○　子どもたちは教員以外の大人と活動することで、職業観も醸成されるため、企業やＮＰＯとの意見交換をとおして、教育活動を充実させられたらよい。これからは、学校を社会に開いて様々な方との交流ができたらよい。

○　大学の授業のフィールドワークにおいて、学生と一緒にボランティアを行うことがあるが、大学で初めてボランティアを経験する学生がとても多く、新聞を読んだことのない学生もいるなど、社会と接する経験を持たないまま大学生となっているように感じる。小・中学生と接するボランティアに学生を連れていくと、とても楽しそうに取り組んでおり、もっと早い段階でこのような経験できていれば、進学や就職に際しても、もっと広い視野で考えることができるため、教育活動全般において、小・中学生との交流のほか、地域の団体や企業との連携が必要。

【中南地区】

○　地域の特性を地域の人たちが理解し、地域の産業を子どもたちに伝えることが大事であり、学校と地域が連携しながら教育活動に取り組めるよう両者が良好な関係性を築くことが重要。

○　コミュニティ・スクールについて、高校はどちらかと言えば二の足を踏んでいるところが多いが、効果は大きい。それぞれの学校の魅力化を検討する際には、教員だけで考えるのではなく、地域の視点も重要であり、それを踏まえた上での魅力づくりが必要。

○　中南地区はもともと弘前市自体が小・中学校のコミュニティ・スクールを県内で一番多く設置している地域であり、高校も他地区と比べて導入校が多い。教員だけでできることは限定されているので、地域の方々や弘前大学の教授等の学識経験者、行政の関係者を入れれば、教員の視点と違ったものが入ってくる。

【上北地区】

○　連携については必須だと考える。学校だけで活動を完結しようとしても、やれることに限界がある。

○　コンソーシアムによる連携は非常によい。

○　実際に工業高校でのものづくりや農業高校での農業体験等において小学生を受け入れてもらっており、連携により子どもたちは高校というものを意識し、進路選択に大きく影響するほか、将来の職業にも繋がっていくものと考えるため、これからも積極的に受け入れてほしい。

○　高校と小・中学校との連携はとても大事。小学校のうちから将来を考えられるような体験をすることにより、中学校で目指す方向を決めて高校を選ぶことが大事であり、できるものは小学校のうちから取り組ませることで、早い段階で自己肯定感も高められると考える。

【三八地区】
○　むつ工業高校の電気科において、研究機関と連携し、気温や風速などを測る装置に関する研究を行っており、こうした連携を広げていくことができれば、学校の魅力づくりにも繋がると考える。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【西北地区】
○　地域としては、県教育委員会が設定した重点校、拠点校、地域校という指定が普通科を強調しているように聞こえ、総合学科等の各校の魅力を阻害することにつながっているのではないかと危惧している。また、重点校、拠点校、地域校の名称を変更あるいは廃止するべきではないか。

【下北地区】
○　下北地区では、小・中学校へ高校が訪問しているほか、大学との連携等も進んでおり、全校種を挙げて交流等を行いながら県立高校の魅力づくりに取り組んでいくことが必要。

３　小規模校における教育活動

＜県全体の視点による意見＞

【中南地区】
○　中学校の特別支援学級には、大きな集団は苦しいと言う生徒もおり、そういった生徒にとって小規模校が選択肢の一つになっている。中学生が高校生活に不安を感じる要因の一つとして、学校規模があるので、小規模校の教育活動の充実に向けた取組を進めてほしい。

【上北地区】
○　小規模校のメリットは、「全職員が全生徒の顔を覚えている」、「少人数制による手厚い指導ができる」等であるとは思うが、やはり小規模校だからできなくなることもあると思うので、何かを得るためには何かを諦めなければならないという現状とどう向き合っていくべきかが課題。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

意見なし

４　その他（特色化に向けた取組全般）

＜県全体の視点による意見＞

【上北地区】
○　人口減少に伴い学校がどんどん閉校になっていると思うが、かつて日本の人口が増加している時には、分校から始まって学校をつくっていったと思うので、逆に今の人口が減少していく中においては、サテライト校のような形で学校を残すことはできないかと考える。スクーリングにより、必要な単位だけ違う学校に行って学ぶことや、ＩＣＴをうまく活用して必要な単位を修得すること、単位互換制度等もうまく活用しながら、小規模化していく中にあっても拠点となる学校を残していけば、地域の子どもたちが進学できるのではないかと考える。

【下北地区】
○　県全体でも私立高校へ進学する傾向が強くなってきたため、県立高校として、私立高校に負けない思いで魅力づくりに取り組んでいく必要がある。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【下北地区】
○　大畑地区には高校がなく、高校に通学するには３０㎞ほどの距離があるため、子どもたちは、魅力のある学校に通うというよりも、家庭の負担等を考えて、通学費が安価な高校に通う。スクールバスの金額も値上げしてきており、このままでは、青森市や八戸市等の他地域に進学する生徒が増えていく。このような家庭もあるということを認識した上で、魅力ある高校づくりについて考えていくべき。

Ⅴ　第２分科会での検討における留意事項等

＜県全体の視点による意見＞

【東青地区】

○　私立高校では遠方であっても、スクールバスで送迎しているが、県立高校にはスクールバスがないため、遠方からでも自力で通学しなければならない。青森市で高校を選んだ理由を調査した結果、近いからとの理由がほとんどであった。これらを踏まえると、県立高校が特色を打ち出したとしても、遠いことを理由として進学を断念する生徒が多くなると考える。また、大学と連携・交流するといっても、大学は郊外にあることが多いため、交通面の整備は重要。交通面の整備が難しいのであれば、遠くても通いたくなるような強烈な特色を打ち出さなければならない。

○　浪岡地区には５つの小学校があるが、それぞれの学校で活動しているスポーツクラブの競技が異なるため、希望する競技に参加するためには移動が伴い、移動の負担を減らすため、バスを運行している。このような要望に応じたバスの運行を県立高校にも導入することで、通学環境によらず、本当に行きたい高校に進学できるようになると考える。

○　生徒の高校進学の選択の幅が広がったり、教員が相互に乗り入れたりするなどのメリットがあるため、将来的に普通高校と特別支援学校の統合があってもよいと考える。

【中南地区】

○　できれば定時制課程の学校が増えればよい。

○　通学の利便性等を理由に二の足を踏んでいる家庭もあるため、通学の利便性についても検討が必要。

○　青森県内の郡部の生徒数の減少は顕著であり、そういった地域の高校を維持できるかというとそうではないが、そこに住む子どもたちがどこで勉強するか、どこであれば通えるか、下宿なのか等といった整備について併せて考えていくべき。

【上北地区】

○　上北地区統合校である三本木農業恵拓高校においては、六戸高校や十和田西高校で行ってきた特色を組み入れてくれていると思っており、高校が統合になっても、特色や学びを引き継ぐことは可能であると考える。

○　異なる学科を有する高校の統合については、教育課程が学科によって異なるため、学校行事が一緒にできなくなる等といった課題がある。

○　公共交通網が発達していないなど、本当に通学できない事情のある子どもたちにとっては、地域に小規模であっても高校があることは大事。小規模校のメリットは、見方によってはデメリットであるという意見もあったが、どちらを取るかといった時には、通学できない子どもたちのことを考えてほしい。

○　今の大学進学は、総合型選抜等の共通テスト以外の受験方法の割合が増えてきており、小規模校においても進学を希望する生徒に対して、教員がバックアップして指導することで、合格できる時代になっている。そのため、普通科の進学を専門とするような高校でなくとも、大学進学もできるし、就職もできる。小規模校だから学力がつかないということはなく、生徒数が減少したから統合するという流れを止められないものかと考える。

【下北地区】

○　教育内容に加え、通学手段の確保等、環境整備に関しても具体的な方向性を示すことが望まれる。

○　少子化が進んでいる時代において、各校が魅力化を図り生徒を奪い合うのではなく、これからは、学科の統合や組み合わせが大切。

○　普通科と専門学科を組み合わせ、地域として総合学科の機能を待たせる等の大学科の組み合わせについても検討する必要がある。

○　１０年前であれば、小規模校の存続は厳しかったと思うが、例えば県総合学校教育センターから配信を行い、その場にいる教員は教科の専門性の有無にかかわらずサポートするなど、他県の事例も参考にしながらＩＣＴを活用する方法もあると思う。現在の本県の地域校には、募集停止等に係る基準があるが、令和１０年度以降は、違う見方で存続の可能性を考えていく必要がある。

○　地方の自治体では、起死回生の一手として全寮制の高校を設置しているところもある。県ではなく市町村が地域の人たちと一緒になってバックアップし、空き家等も活用しながら進めるなど、新たな方向性についても検討する必要があるのではないか。

＜各地区の実情を考慮した意見＞

【東青地区】

○　東青地区において、職業学科や総合学科の配置は妥当だと思う。

○　中学生は、県立高校の看護科を志望する場合、黒石高校への進学しか選択肢がない。県立中央病院と青森市民病院の統合により、医療の面でも青森市が中心になっていく動きがある中、新設される病院の近くに看護科や、薬学系の大学進学を見据えた学科を有する高校を配置してもよいと考える。

【中南地区】

○　中南地区の基幹産業は農業、工業、観光であり、中南地区の高校は、そのほとんどをカバーしている。

○　通学の利便性を理由に二の足を踏む中学生もいるため、通学利便性についても検討が必要。

【上北地区】

○　上北地区にある高校はいずれも重要であると思うが、現状からみて、縮小・統合はやむを得ないことから、分校化や夏期・冬期休業を利用した短期集中講座によって共通科目の統合を図ることで、教育機会は維持しつつ、費用は抑えてほしい。

○　上北地区はエリアが広く、通学費等の面で、通学が難しくなってしまうことがあるため、上北地区にある工業、農業、商業高校をなくさないでほしい。

【下北地区】

○　下北地区から学校がなくなることは非常に大きなこと。学校がなくなるということは、学校と地域とのコミュニケーションがとれなくなることや地域の人にとっての憩いの場がなくなるということであり、教育だけの話ではなく、経済や文化の衰退等に繋がっていく可能性がある。そう考えると、小規模校を残していくということもこれから考えていく必要がある。

○　子どもが減っている状況であるからといって、学校をなくすのではなく、ＩＣＴの活用や通学支援など様々な部分を組み合わせてアイディアを出す必要がある。下北地区は課題の最先端だと思うので、様々なことを試すには向いている地域であり、チャレンジしていけば新たな形が見えると考える。

○　１０年後、２０年後を見据えたときに、生徒数が減少していく中で、新設校を設置しても入学者がいなければもったいない。建設・解体に係る費用があるのであれば、田名部高校に集約すればよいのではないか。そうすれば、路線バス等があるので通学費を抑制できると考える。